KSKR パンジーだより　No.86　第三種郵便物認可　通巻第 8322 号　2021 年 2 月 14 日発行

KSKR パンジーだより

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

もっと私たちの意見をきいてほしい、そして、一緒に考えてほしい

２０２０年はコロナに始まりコロナで終わりました。そこで今回は、コロナの感染が広がって、屋外での活動を控えている時期だからこそ見つけられたことを紹介します。

インターネット放送、第５１回「きぼうのつばさ」で、スウェーデンで出版された『人間としての尊厳』から「第１章　ぼくたち、わたしたちにも、人間としての自由と権利がある」の一部を紹介した時のことです。本には「障害があるからといって差別されてはならない」「むずかしいことがあったら、助けてほしい」「職員は、いっしょに考えてほしい」などの印象的な言葉が書かれています。それらの言葉の中で、どれが当事者の心に最も響いたかを聞きました。その答えは、「ぼくたち、わたしたちの意見を、よく聞いてほしい」でした。

私たち職員は、当事者の思いを聞き、その思いを尊重する努力をしているつもりになっていました。それだけに、当事者の人たちが、「もっともっと聞いてほしい、一緒に考えてほしい」と思っていることを知ったのは、少なからずショックでした。そして、それを職員が満たす努力をしないと、当事者の中から湧き出るエンパワメントにはつながらないと気づきました。

それ以来、これまでよりも当事者と話す時間を作る努力をしています。すると、「大切な気づき」をたくさん受け取ることができました。私が想像もしていなかった言葉を聞き、その言葉に突き動かされるように、この状況の中でどうすればいいか迷っていた今後の活動を、決めることができました。

コロナの影響で得たたっぷりの時間に感謝です。（林　淑美）

シリーズ　アンナプルナへの道　NO.1

すごく遠かった。
でも、あきらめんかった。

このコーナーでは、ヒマラヤトレッキングに挑戦したメンバーの言葉をシリーズでお伝えしていきます。

初回は、パンジーⅡの伊藤恭介さん。

伊藤さんは、新しいことに飛び込んでいったり、やってみたいというチャレンジ精神が旺盛です。その一方、とても繊細な心の持ち主でもあります。初めて取り組むことには、挑戦したい気持ちと同じぐらい、不安な気持ちも持っています。それは山登りでも同じでした。

パンジーの山岳部に入った当初、奈良県の生駒山で足元が岩でデコボコしている山道や、下りの道に苦戦して、怖くて涙してしまったこともありました。しかし、伊藤さんはみんなと一緒に活動したいという思いから、あきらめずに練習に励んできました。

仲間と一緒に挑戦すること、そして支えてくれている大切な人に、自分のがんばったことを伝えたいという気持ち。伊藤さんの言葉からは、そんな思いが伝わってきます。（北田）

ヒマラヤに行くまえに、家族とパンジーのみんなに、「ヒーローになる」って言ってきた。がんばらな。絶対に行こうと思った。

山はゆっくり歩いた。石がいっぱいあって、歩きにくい道がいっぱいやった。道が傾いてるところとか。怖いところもあった。不安やった。でもがんばった。みんなが応援してくれた。ちょっとずつ、できるようになってきた。

泣いたこともあった。しんどい時もあった。

登りにくい道。長かった。すごく遠かった。

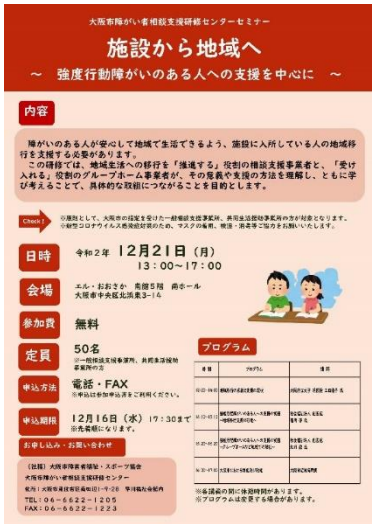
「いつ着くの？」って何回も聞いた。たくさん休けいして休んだ。でも、あきらめんかった。約束したから。　（伊藤恭介）

たくさんの方から、DVDを観た感想をいただきました。一部紹介します。
もっともっと、いろんな人に観てもらい、
知的障害を持つ人たちの思いを知ってもらいたいと願っています！

✎　ＤＶＤ拝見しました！　どの場面も懐かしく、そして大切なメッセージがこめられていて、ピープルファースト発足前の佐々木さんはじめ、各地の当事者の活動、そして折々のピープルファーストの活動を『福祉労働』を通じて伝えてきた者としては感無量です。
日本における知的障害者の当事者活動、ピープルファースト運動の歴史と精神を、次の世代の当事者たちに伝えていかなければ、という生田さんたち当事者と、パンジーの皆様の想いがひしひしと伝わってきました。２５年間の蓄積を受け継ぐ次世代の仲間たち、そして支援者やマスコミ関係者にもぜひ観ていただき、一緒に運動を担ったり、社会に当事者の声を広めていくのに役立ててほしいですね。（東京都・小林律子さん）

✎「私は子供の頃、障害を持つ人に対するいじめに加わっていなかっただろうか？そして今は？」この映画を観て、最初そんな風に過去、現在を思いました。障害のある人達の心の奥にある気持ちを知っていただろうか？　また知ろうとしただろうか？　今まで彼らの問いかけに耳を傾けていただろうか？「私たちは障害者である前に人間です」「私たち障害をもっているものが自分で自分の人生をきめていく存在になることです」。これは正に障害者のまっとうな主張です。この主張がまっとうと思われない社会は、優しい寛容性に富む社会とは言えません。
ピープルファーストを通じて彼らは意識が芽生え、団結を強くして声をだし主張し始めた事を知る。今私は思う。障害者同士だけが仲間ではなく、私たち皆が人間として同じ仲間だと。
これからは対岸にいる私ではなく、ごくごく普通の姿勢で仲間として彼らと接したい。そう心掛けたい。　（香川県・小比賀栄作さん）

自分たちと同じ一人の人間だと感じてほしい



２０２０年１２月、大阪市主催**「施設から地域へ～強度行動障がいのある人への支援を中心に～」**がありました。入所施設から地域への移行をすすめたいという大阪市の強い思いのもと企画されたものです。
新型コロナへの感染対策が取られる中、パンジーから北田と福岡の職員２人が講師として登壇し、約 80 名の参加がありました。

講師の大阪府立大学の三田優子先生は、地域移行を推進する立場から研究されています。題材の映像はパンジーが２０１０年に製作した、大規模施設砂川厚生福祉センターとの地域移行の取り組みを描いた**「地域で暮らすために　～強度行動障がいを示す人の可能性をさぐる」**です。入所施設の職員と地域の福祉関係者は、お互いの状況を知らなさすぎる。この取り組みのように連携することが大切だと話します。

パンジーは、パンジーメディアで製作した**「ふたりの知的障害者」「健司は健司のままでいい」**を上映し、行動障害のある人の地域生活支援を伝えました。当事者の大川誠さんは三田先生が紹介した 10 年前の映像と、「ふたりの知的障害者」両作品の主人公。入所施設に入った経過、地域移行の取り組み、今のくらし。その人の障害に目を向けるのではなく、ライフヒストリーを知って、自分たちと同じ一人の人間だと感じてほしいと伝えました。

「健司は健司のままでいい」は、入所施設からも断られた当事者、上田健司さんの自立への取り組みを追った作品です。行動障害はその人の問題ではなく、支援者の関わりを変えることで見通しがもてることを示します。「強度行動障害」とレッテルを貼られることで、多くの人が地域で暮らすことを諦めさせられてきました。この研修を通じて一人でも多くの人が地域で暮らす機会になれば幸いです。（福岡）

参加者からの感想を紹介します。

・皆同じ人間という認識の再確認ができた。あくまでも中心は利用者さんであることの認識。
・支援においてヒントになることがあり、ホームに帰って実践していこうと思いました。
・ビデオを通じ、入所施設と地域生活（GH）の暮らしの違いや QOL について学ぶことができた。
・小学校から普通学級で過ごすなど、親の想いが感じられた。施設に急に入れられて、混乱して問題行動起こすのも理解できると思った。
・わかりやすくて良かった。職員が利用者に「指示する」でなく、「リードする」との表現に驚いた。
・支援者が一方的にスキルを伝えるだけでなく、本人に自ら考え行動できる機会をつくるという支援を行うことで、本人も少しずつ変わっていく姿が見られて勉強になりました。
・地域移行、定着についての研修は何度も受講してきましたが、手法ばかりだったと思います。今日、はじめて心から「必要な事業だ」と感じました。「この忙しい中」とブツブツ言いながら出席したことをおわびしたいぐらい心に響きました。ありがとうございました。

各場だより

春を先取り

パンジー

この日パンジーが取り組んだのは、春に咲くチューリップの球根やビオラの苗植えです。定期的に花壇のメンテナンスに来てくださっている、花咲香さんから植え方を教えてもらいながら、みんなで挑戦！

目の見えない堀川さんはビオラの苗を植えました。土を手で触って、鼻で匂いを感じながら「お日さん当たって気持ちいい」と、花壇に腰掛けて、しばらく日向ぼっこして過ごしていました。

久米さんは、スコップで土を掘るのが面白くて、次々と穴を作っては球根を植えて、うんうんとうなずきながら支援者にできた事を伝えていました。

田巻さんは普段、周りの人が気になってジェスチャーで拒否を表すのですが、パンジーの畑や園芸で土を触っている時には、そういったしぐが一切なく、晴れやかな表情でした。

こうして一通り苗と球根を植え終わった後は、上田さんが最後の仕上げに水やりです。

来年の3月頃には、色とりどりのチューリップが咲くのを楽しみに、これからも中庭の手入れをみんなでしていくことにしました。

（上家）

コロナって何なん！

パンジーII

3月の末、「コロナウィルスってなんなん！」と、パンジーIIに通う河野明裕さんが私に怒ってきました。

河野さんの趣味は、電車に乗ることです。電車に乗って景色を見ていると気持ちがスッとするそうです。しかし、河野さんの大切な時間をうばう出来事が起こりました。コロナの流行です。日本で広がりはじめた頃、テレビからたくさんの情報が流れました。それを見て不安になり、怒るという方法で、電車に乗っていいのかどうかを聞いてきたのです。

私も初めてのことで、どうしていいかわからず、曖昧な事しか答えられません。2人で困りながら、話をする毎日でした。

そして、河野さんが出した結論は、「今はコロナに感染するのが怖いから、電車に乗るのはやめる。代わりに新しい趣味を探す！」子どもの頃やっていたゲームをしたり、DVDをレンタルしてアニメを観たりと、新しい趣味が増えていきました。

9月になり、河野さんは感染予防のマスクをして電車に乗れるようになりました。「早くコロナがおさまって、遠くに行きたいな！」とちょっと人の少ない方面に出かけています。

実は河野さんが一番好きで、したい事は、新幹線に乗って東京や名古屋などに出かけることなんです。

コロナの情報があふれる中で、これからも河野さんが自分で決めていけるように、一緒に悩んでいこうと思います。

（西野）

なごやかに、おいしい弁当づくり

パンジーⅢ

パンジーⅢでは毎日４か所、約２００人の給食と、２４か所のグループホームの夕食を作っています。作っているのは、調理師、職員、そして当事者の人たちです。

「弁当作りがしたい」と４月からパンジーⅢに異動した冨田さん。仕事は一通りできるようになりましたが、積極的とまではいきません。そんな時は、弁当づくりの先輩の中山さんや山田さんが「やるで！」と声をかけ、よしっ！とうなづきスイッチが入ります。

厨房の仕事は立ち仕事です。昼食の時間に間に合わないといけないなど、大変です。だけど、豊田さんがふざけて冗談を言い、中山さんがツッコミを入れて・・・と、なごやかな雰囲気です。

ネイチャークラブの活動時は厨房で作業をする人が少なくなります。そんな時に大活躍するのが湯村さん。人が多いところが苦手な湯村さんは、人数が少なくなるほど作業のスピードが早くなり、職員が追いつくのに一生懸命です。

その横では久山さんがいつものペースで、大きな調理器具を拭いて片付けています。

こんな感じて、パンジーⅢの厨房では、個性豊かな当事者が毎日ワイワイ楽しく、弁当づくりをしています。

（黒田）

ちゃんと育ってな！

パンジーⅤ

１０月の終わりパンジーⅤの畑に植えたさつまいもが、収穫の時期を迎えました。今年は四国名物きんとき芋に、紅はるか、安納芋が仲間入りをしました。

嬉しそうな表情で、一生懸命掘っていた高木さんに「早く食べたいん？」と聞くと「うん」とのこと。どう食べようかと、さつまいもとにらめっこの高木さんなのです。中條さんは「見て！おっきいさつまいもがよっけあるわ～！」と、土の中から掘り出していました。

収穫したさつまいもは２～３週間熟成させた後、市場で販売し、お客さんに買ってもらいました。それから、みんなでスイートポテトを作って食べました。おいしくて、もう一回食べたいわ～！と大好評でした。

さつまいもを掘り終えると、来年に向けてそら豆の種植えです。泉保さんは、鼻歌を歌い、そら豆に「ちゃんと育ってな～」と言いながら、一粒ずつ、大切に植えていきました。来年は、きっと、大きな、おいしいそら豆が収穫できるでしょう。パンジーⅤでの畑作業は、当事者の色々な表情、感情に出逢える大切な時間になっています。

（川股）

スーツに歴史あり
大川誠さんの地域生活２

GH

グループホームの大川誠さん。クリスマスに向けてスーツを購入するために採寸に行きました。

試着室でジャケットを着て、ズボンを履き、体のサイズを計ってもらう大川さん。しばらくするとしびれを切らして帰りたいモードに。でも最後まで採寸することができました。

大川さんは、いわゆる強度行動障害のある人で、１０年前に入所施設から出て、パンジーのグループホームで暮らすようになりました。

入所施設にいるときは、服を着ることができず、裸同然で過ごしていたそうです。庭の砂を食べてしまうこともありました。それがグループホームの安心した生活の中でスーツが着られるようになるまで、回復してきました。

パンジーに来た当時の大川さんの支援を撮影した映像を、強度行動障害を持つ人たちの地域移行を進めるためのセミナーで紹介したことがあります。

１０年前のことでしたが、最近になってその映像を見た方の話を聞く機会がありました。あれだけ大変な支援が必要だった大川さんの映像を見て「あの後はきっと入所施設に戻っているだろう。今はもう地域で過ごしていないに違いない」と思っていたと話されました。

それは考えさせられる話でした。強度行動障害など、人が名前を決めているだけで、どんなに障害が重くても、その人を尊重して支援することができれば、大川さんのように地域で買い物をし、好きなものを食べ、そして自分で決めるといった当たり前の生活を送る事ができるということ。

これを大川さんからのメッセージとして、多くの人に知って欲しいと思います。

（西村・北田）

東大阪市に伝えたいこと

相談支援

１１月初旬。東大阪市の障害福祉担当の職員との話し合いがありました。市内の障害者団体が、毎年行っている取り組みです。当事者として困っていること、改善して欲しいことなどを訴えます。パンジーも当事者・支援者が、できる限り参加しています。

今年は、コロナの影響もあり、パンジーからはリモートで参加することになりました。

市役所会議室で、職員と団体の選抜メンバーとの話し合いがされるなか、パンジーのメンバーは施設内のホールに集まり、やりとりを見守りました。当事者として、リモートからの発言も用意していました。

特に言いたいことは「入所施設」と「大規模グループホーム」についてです。入所施設で暮らす東大阪市の人が、地域で暮らせるようにすること。また、入所施設のような大人数のグループホームが全国で増えており、東大阪市でそのようなグループホームをつくらせないことです。

時間が押したこともあり、残念ながら、発言の機会はありませんでした。しかし、当事者の思いを市役所の人にも分かってもらい、障害のある人の暮らしがより良くなるように、これからも伝えていきたいと思います。

（梅本）

書き損じハガキ、（未使用）切手を送ってください！

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか？
当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします。

匿名希望　　黒瀬清隆　　宮田程子　　岡本育子（敬称略）

パンジーでは、後援会員を募集しています。

賛助会員　１口　1ヵ月　　５００円　　本会員　　１口　1ヵ月　1,０００円
特別会員　１口　1ヵ月　3,０００円　　郵便振替番号 00950-1-300551　ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ「パンジー」
<寄付を頂いた方＞　志村美幸

編集人
東大阪市東鴻池町２－４－８
ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ　TEL:072-963-8818
「パンジー」　FAX:072-963-8825

発行人　関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町２－２
東興ビル４階

パンジーＶからのお知らせ

NHK 歳末たすけあい中間助成により、
パンジーＶに野菜用の低温貯蔵庫を
整備できました。
大事に使わせてもらいます。
ありがとうございました。

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価　１００円